【 63 】

氏名	田 中 良 治
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	博乙第1881号
学位授与の日付	昭和63年3月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学位論文題目	Follow—up Study of 582 Liver Cirrhosis Patients for 26 Years in Japan （過去26年間にわたる肝硬変症の予後に関する検討）
論文審査委員	教授 太田善介　教授 木村郁郎　教授 赤木忠厚

学位論文内容の要旨

昭和33年より26年間に腹腔鏡ならびに組織所見より肝硬変症と診断した582例（男性486例，女性96例）の長期予後を検討した。対象を成因で分類すると，B型肝炎ウイルス（HBV性）21％，アルコール性39％，および原因不明群39％で，そのうち59％が既に死亡していた。死因の内訳は，肝癌44％，肝不全30％，食道静脈瘤破裂14％，消化管出血4％，肝疾患以外の死因8％であった。肝癌は1980年以降急速に増加しており，どの成因においても死因のトップをしめていた。過去26年間に肝硬変発症年令は10才（42才から52才），死亡年令は15才（43才から58才）高齢化しており，通常の生命表法の検討で，全例の50％生存期間が7.9年に対して昭和30，40，50年代のそれは各々7.0，8.5，10.0年で，時代とともに改善していた。成因別の予後の差を50％生存期間でみると，HBV性9.5年，アルコール性6.3年，および原因不明群9.8年で，アルコール性が有意に悪かった。さらに，肝硬変症患者はどの年令で発症しても，その年令の平均余命の40～44％の生存期間で死亡していたという興味ある結果を得た。最後に，Coxの重回帰型生命表法を用いて肝硬変症発症からの生存期間に影響を与える重要な予後因子の重みづけをおこなうと，飲酒歴が最も重要で，大酒家ほど予後が悪く，非飲酒家に比べて2.5倍のリスクを持ち，また発症年令は高年令ほど予後が悪く，診断時期は最近になるにつれ予後が改善した。

なお，本論文は共著論文であり，共著者の協力を得て完成したものである。

論文審査の結果の要旨

本研究は昭和33年より26年間に腹腔鏡ならびに組織所見より肝硬変症と診断した582

例（男性 486 例，女性96例）の長期予後を検討したもので，その，59％が既に死亡し死因の内訳は，肝癌44％，肝不全30％，食道静脈瘤破裂14％，消化管出血 4 ％，肝疾患以外の死因 8 ％であった。また成因別の予後の差を50％生存期間でみると，B 型肝炎ウィルス性 9. 5 年，アルコール性 6. 3 年，および原因不明群 9. 8 年で，アルコール性が有意に悪く，肝硬変症患者はどの年令で発症しても，その年令の平均余命の40～44％の生存期間で死亡する等が明らかとなった。これは臨床的に有意義な成績であり，よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。